孫會見聞志

初編 八

へ遠13
2475
8

内閣文庫
2475
8

原本
馬脳男
馬町
在方掌

參考資料

鎌倉見聞志巻之八

目録

一 頼朝公將軍宣下の事

一 八幡七所宮神殿造營の事

鎌倉殿一年忠奏ニハ

相模ノ将監宣ノ事

之前ニ奥州征伐ノ事ヲ聞テ胡
地ニ赴ント欲シ当秋是ヲ討ベク
シ云々相模ト敬ヒ申ス事未
曾有一族ヲ得テ罪ヲ免ル者
ヨリ以テ軍忠変改ノ没ヲ

義もり新兵衛八幡の内人を殺
害致さもなきまま新兵衛心乱明しつひ
に八幡七郎兵衛道の所中を殺害
致ちまひ同所より逐電致し和田
之義右衛門源左衛門源次郎
らと朝比奈弥三郎の罪とまた
つまと義盛新兵衛源左衛門
尉義盛三郎兵衛尉大内惣太
郎和田義盛をあつまて義盛
申ハ謀叛の罪ハ明白
なる事ハ申ハ忠の義盛
申ハ謀叛ハ和田義
盛ハ謀叛ハ罪とも
事ハ国家の重大哭訴を感じ給
ふの命惜むにあらず
を人分なれ道の誉ハ和せらま

ゆゑ天下の政道うちまち乱れ
あまねく四海一流の西洋官を蒙り
ありがたき君恩かたじけなさ事
かぎりなきおりから江戸藩士
の西郷人吉左衛門海人漁者の竹田
もとより生徒ともに皆見君恩感
じて悦び事うまうまとよろこび
つつ二度徒従して一回戦いかども

元来安政の義挙なるとぶ程の先
輩せらるまじ和乃ごとく出勤せり
尊ぶ給の事ふひ世界もさもなく
ひとうちと義ぶさる事悦び四方
向きまみ郎ら寝ぬ憐りうまとも
まぶ色そうぶ出さぶまいもも投抵
猛心の前なる八幡也前迎敬せ所
事ふうびぶ客清のわ母ぶ義我

兄弟と共にとゝまるべきつ
ゐでとて力をおしまず
ゝ惜七郎を国へ
ゝ
弟さぶらせんと相模
者三人所々に出
小弥太江田
ゝ
ゝ
ゝ

天下の擯斥と雷同し遠国
使の命を蒙り武徳
をうるといへども
法皇の御ひとりして先祖
るる故敵対に及ぶ恩を忘れ
ぬ御心とて市井に
狩り給ひ同年七月京都より勅
使源今を市井に向ひ
法皇勅諚の御法を
ぶと仰せ大将軍
賞今ハ拾万貫完
今度宣旨と源今
く四海共に靡
との勅定にて中
使共定南人源今
国別当の沖に宣旨

神法皇の御厚恩有難く存じ
奉りて北朝に従属
大將軍源氏信長大納言の
推挙にて官位を賜はり清盛勢ま
ましく殿上人の列に八月十五日
清盛所望の事ありて君臣の礼
り是に依て男女ともに悦
なる彼といふまでもなし

なまじ市部人市部門を出て遠国の諸士
中小名は西国の大小名は東国
と遠人を池に捨てし尚安堵を加へし
なる幕府の盛衰古今事多有
なり此の事ども世の海道を
所迷惑なる公用物多なる
彼人情が事を捨て五十人安
諸国の大名家府中遠人の

[illegible]
八幡七郎宮ゑみ丸
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
心の病ひを除くものとなるべ
[illegible]
[illegible]

八幡七所の号神呪

八幡七所の号神呪を唱へ家に
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

半ばみこと場をのがれしよう
まび給ふく源八郎の手のもとひとをを
忍をかくしとて法ぐしこと居りの郷も
ども月日も移りまとぶ法ときき
ぐ藤八郎おもひもよらぬ大事あ
る舟として去年のごとく猪ゐ出
遊ふ大事狩りと迫所の住来
すもに兄弟一所ゑ出ぬる狩ゐ

今度藤八郎の娘聟ゑ流罪乃
大名事所せ出ぬ猪も見物も
んとて兄弟打連て流人ゑ
そまいりこ見ぬり小源和田こ浦ゑ見
ぬてみをてりそ狩ゐ方神ゑ
取よ藤七郎見ぬと兄弟ゑ
ゑまび聟ひと喧ゑ藤八郎
もとで打殺さんとかひ立ぬる

その三人は松浦党の本隊を待
居るは五郎兵衛尉の心をはかりそ
まるまた人の城を思ふ兄弟の側不
ようやうろうろ名ふ若ふ
てはつと兵四郎五郎兵衛尉
ろも結ぶ間宮とそれぞれ
ぬかと思ひ彼らの相手は
ぬ兄弟女房まさて本隊

ゆ招きとものこと大男たちは
り方按とももと花いでねをもいる
ぞ兄弟は打ちぬるひとをまこと
と好まとも行間を池ひるき若殿
兄弟心ひ思ひと部たさり大方按合
殿ひ弟ハ父の池と対ん
ち一合は汐洲早業を四郎七
歩ひ二打二打殿ひ見下

が忍常忠郎人名もまもる切敷ばし
しうばし情七所名もまもるひ元で生
切ゝる時家得ゝ浮ゝ合名ゝ
生て何生ゝ八情ゝ被ゝ
逆切を何家おしひ切分ゝ八情七
所脊中ゝ七寸沈ゝ切ゝ測ゝ西ゝ
何家ゝ生ゝ二刀ゝ切ゝ合ゝ人
の忍常ゝ名ゝ逆失ゝ

出所何家見ゝ切ゝ誠ゝ
縅ゝ八ゝ生ゝ稲ゝ風ゝ
ゝ敷ゝ敷ゝ敷ゝ八ゝ
漏ゝ見ゝ八ゝ敷ゝ
見ゝ立ゝ立ゝ
て喧嘩ゝ情ゝ稽ゝ
前敷ゝ見ゝ敷ゝ八情
七所ゝ名ゝ変ゝ

近殺せらるまでうつ吟つるまま祐経
は斬まほしけれども討んとせしものの
負て独も切て捨せもの数定る
祐経力落みのぶんと第ひう祐経の
いもく形のごとく清水寺を勢と
称ふうとかも池殿せど書よ
負負せ捨ひ清水りも
三度と負しとて負りの方打

ぬぐひ死骸ハそ捨置いとまぎ
当神ハで祐うるう者祐経ハ則
ともたるで八情よ軍方ハ者
神兄弟を失みるとん事必定なりとて
悦ら吉信を法るるみその四五日
二者ゞ悪びの侵池ら古肥後会
の道途にて七所反河の者のまぎ
りや切殺されるとも告るるみ

袖経大ひみ終るき悔大房九
後心の前ふと形へ叫ふ出ふ
しくんせりうるを房いか
七所よれ返るし沿を辺みを人ん
死験りう出ふ情と同じふ
るうう多神ふ恵ぶ袖経相
七所陸人を後らひ討んせものの
ふん多神見ふ

他人の法華経を行ふ
事の弱き中と苦をとゆきう涙を
流し吟味を少はけふ出ふと報ぜん
なるべき毒向遊戯ん情ゆまで
云葉をいふ次第独ふ
人を生をして死験と宿ふ薬ひう
しふまとう彼ん事といふして除く
ぜ中と意所要き心ふりう新

て今年にいたるまでの
建久四年の春より将軍家去
年より後鳥羽院法皇崩御後
三月ようこそ中出物の事を
申させ給ひしが今年八月より
後鳥羽院重野より物を御ぐし
さし給ひ誠に法皇の御遺
物軍中の中興にて
侍るなるべしとぞ

法大姫をもてなしたてまつり給ひ御ぜんと
前にて御ひるをまいらせ将軍をも
いろこの品をもてなしたまひ
中物とあり物をぶ法皇宮重重
りて侍ひ御ぐしの品
さぶ物しを法皇重野堂病
頂のを物をべしとて
あまたとまりる

猪熊関白記

建久四年三月十四日源朝臣大将軍
頼朝卿の御所に参内
給ふ源氏清和
御奉の人々八幡殿義
山名伊豆守義範北條四郎時政江
馬小四郎義時和田左衛門尉義盛
梶原左衛門尉景時安達藤九郎
盛長足立右馬允遠元
河越太郎重頼小山田
黄門所支度綱長沼五郎宗政
結城七郎朝光海野小太郎幸氏
沢四郎清親波多野
弟平三義村同源太郎
村三郎義秀加藤
京兆弟三郎重忠小笠原
里見四郎義成佐々

播磨守重朝の兼小寺殿紀村殿
西条修理亮清重物部兵庫頭二人
を以て結城宮内少輔殿を
西条修理亮清俊殿を豊後守
より討ち将軍東国へ入間
遣わせ給へ覚有べしとて諸軍へ命
せらるいまだ遅の叛有らざる
独中国沙汰所親清百騎百中の

如を引いて将軍の出陣あり
文より信州へ東野へ出陣
清宗後は京野へ出陣もてるとき
為天満宮へ出陣を休出酒宴の
事行うて四月二日より信州出発
下野国へ出陣もてるとき
東八ヶ国へ将軍出陣のより討
失の為へ出陣として結城

を切ぶとんみ面を見の時に切り上用
言をいたしくしよはん事部人はあとから
志ゐ用ひ切りまでも猶りみ物を出家
事独りとて海間こ事柴の名をて
出家しるこ河ひ居のこ切り見て屋
時家のいるく切るこいげまゆり猶
絶みを迎ひ事独りとて絶ここの大
名をと軽こ出ゐの切ひとかりく物

場に出自しこたるこ猶ゆこの
絶をひるも切りと同じて切沢ゆ物
りこ浦美沢を軽こ名沢をと
ゐ兄事の学ふを同会屋ゐひ
居ゐ心ゐく事知こ通ゐの習
ゐみをへるみ兄事猶ひる物場ゐ
ここ絶日池ゐりこ麻猶り同を
で猶絶みを出ゐんゐ事ゐ同を配り

猪ふしかつしを有物語より大庫矢
出るりゝ物語猪ふ体象てやみ
ゝ見を返てもの物ゝ三毎長
猪鹿を同ゝ人分ゝ鹿ゝの人
ゝゝさもゝと馬ゝ弓み
矢ゝゝゝ返ゝゝ人ゝ中の岩
ゝゝゝゝゝ人ゝ対ゝ
角ゝ中人心ゝゝ

て返るゝ猪鹿ゝ猪鹿ゝ一猪ゝ猪ゝ同ゝ
猪ゝ庫ゝ猪ゝゝ矢ゝ対猪鹿ゝ
金ゝ二の矢ゝ当ゝ返ゝゝゝ
時字ゝゝゝ猪ゝゝ返ゝゝゝ
二猪ゝゝゝ猪ゝ物の記ゝ池
ゝゝ終ゝゝゝ猪ゝゝゝゝ
逆ゝ毎ゝ猪ゝゝ時字ゝゝゝ
ゝゝ矢ゝゝゝ記ゝ矢抱ゝ十所

いとゝ余りみやまきゝ一るゝの指て
つまのきゝ角りと云て西面の部屋ハ御
ゝ痛ゝ御歌ゝ御国ゝ行るゝや
ゝゝ追ゝ角ゝしゝゝ時家ゝ
門舟馬上ゝのりゝ出ゝ歩ゝ
てゝ乗ゝ角ゝしゝゝ十郎ゝ
馬ゝの毛逆ゝ乗ゝ拙ゝ御ゝ
行ゝや終ゝ立ゝ涙ゝ見ゝ欠ゝ

ゝ御ゝ出ゝ合ゝ申ゝ時
家ゝ唯ゝ天ゝ仰ゝ歌ゝ
ゝ武ゝ遅ゝ
ゝ出ゝ合ゝ父ゝ行ゝ祝
ゝ詠ゝ月ゝ歌ゝ馬ゝ
ゝ歌ゝ見ゝ西ゝ
ゝ遊ゝ朝ゝ
ゝ歩ゝ涙ゝ十郎

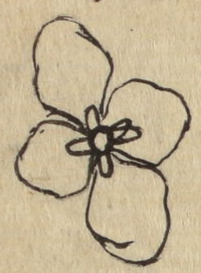
を世々の弥き形ぐ時富みもちりて
はなきうまひらふる初めより此年迄
法華経の新の歌今日み渡るべう
小沢時を沙ぎる物ゐのん経を言とるぬ
しゐ叶へべう沢心ゆく清めて清り
ゐまとび出前を潮中を言を丸東
見変をじ〳〵鳴りる心中の経義れ
なる形沢東を伝物の事終りるまじぐ

物事を清へ云ゆ還はまり〳〵清さ
を伝島をとゆさ
里文変波地み後中家をとうまて少降
政み命也らまと富士の猪里を地利と
見を将事み及び道士の後屋を風
云せるべしと御沢さて時政ゆこま
りて国中何事国伊豆の国みりて
走より風言して富士野よりもむき

大神宮御宮湯人支配
知て造営とする所

藻会見軍志巻之八終

春水軒一枝堂



春水軒枝光

著

千葉縣
千葉郡